泌尿紀要21巻9号
1975年9・10月

随　想

サルの罠

渡辺　決*

インドネシアかどこかのある島の原住民は，野生のサルを捕まえるのに一風変った方法を用いるそうです．それはサルのよく来る木のそばに，サルの前腕がやっと通るくらいの太さの中空の竹筒を固定し，その竹筒に手を入れないと取れない場所に，いかにもサルの好奇心を惹きそうな玩具などを，これ見よがしに置いておくだけなのだそうです．ここを通りかかったサルが竹筒に手を入れて玩具を掴むと，手が竹筒にひっかかって抜けなくなりますが，サルは決していったん手に入れた玩具を離そうとはしないので，簡単に生けどりにされてしまうのです．時には仲間が捕まるのをみて，それが危険な罠であることを知りつくしているのに，それでも好奇心を抑えきれず，キーキーなきながら竹筒に手を入れてしまうサルもいるそうです．

私はこの話を聞いたとき，身の毛がよだつのを禁じ得ませんでした．なぜといってその光景は，私が日頃職業としている科学という行動そのものの，まさに格好なカリカチュアであったからでした．

人間がものをみたとき，人間が存在を認識したとき，人間はどうしてもそれに触れ，それをこわし，その中味をみないではいられなかったのです．人間はその中味にまた異質の存在を認めました．そしてまたそれに触れ，それをこわし――これは無限のくり返しにすぎません．

しかし人間はその努力をやめようとはしませんでした．やめるどころかその行動に大きな意義さえ見いだしました．それは真理の探求という言葉で表現されます．ああ真理という文字は，何と私たちの目に美しく映ずることでしょう．そして探求という作業は，何と高尚な労働なのでしょう．さらにまた人間は，その行動のパターンを，途方もなく大きくて強固な，ちょっとやそっとの反省や思索では揺ぎもしない，完璧な組織にまでまとめあげました．それが科学という方法論であります．

なぜ人間は真理を探求しなければならないのでしょう．なぜ人間はもっと宇宙を知らなければならないのでしょう．おそらくこの衝動をうまく説明できる人はいないと思います．しかし説明する必要はないのです．なぜなら人間なら，だれでもこの衝動をもち，この衝動が言葉で説明しうる以前の，いわば人間の本性に属するものであることを理解しているからです．

ところでこの本性は，玩具をみて手を竹筒にさしこむサルの行動と，いったいどこが違っているのでしょうか．サルは玩具に出あった瞬間，それを手にとってみずにはいられない，理由のない衝動に駆られるのです．このときサルは，サルがサルであるための，本来もっともサル的な本性にたち帰っているといえるでしょう．サルの本性は，そのまま人間の本性であります．

科学は好奇心の産物であります．美しく飾られ，巨大にそびえ立ってはいますが，それはまさしく人間の好奇心に端を発し，好奇心によって発展し，好奇心によって支えられています．

ただ好奇心に駆られて手をさしのべたサルは，玩具といういかにも自分にとって役に立つものを手に入れました．これはよいものだ，これを持っているのは自分だけだ，これを持っていればきっといばれる，だからもう他のものには渡せない．そうサルは思ったかも知れません．サルは二度と玩具を離そうとはしませんでした．

科学は好奇心とエゴイズムの奇妙な複合体であります．好奇心という衝動から出発した科学は，エゴイズムという絶好なつっかえ棒を得て，そらおそろしいほど発展しました．でもその努力は，案外竹筒に手をつっこむサルの行動と大同小異であったかも知れないのです．

玩具から手を離せなかったサルは，いったいどうなったでしょう．これは現代の寓話であります．

* 京都府立医科大学泌尿器科学教室　教授